

「あるはず」なら使える定冠詞

前回の話では、名詞に定冠詞がつく理由を三つにまとめることができると述べた。それは「前から知っている」「さっき聞いたから知っている」「目の前にあるのでわかっている」の三つのケースで、次の例がそれぞれに当たる。

(1) *Le chien est fidèle à son maître.* 「犬は主人に忠実だ」

(2) *J'ai un chien et un chat. Le chien a trois ans et le chat a un an.*

「うちには犬と猫が一匹いる。犬は三歳で猫は一歳だ」

(3) *Attention au chien!* 「犬に気をつける!」

この三つに共通するのは、*le chien* が何をさしているかが聞き手にわかるという点である。*le chien* は(1)では「犬という動物」、(2)では「私がひとつ目の文で話題にした犬」、(3)では「その場にいる犬」である。(1)の犬は頭の中に知識としてあり、(2)の犬は先行文脈にあり、(3)の犬は現場にいる。いずれの場合も定冠詞 *le* の意味するところは、「*le chien* のさすものがどこかにあるからそれを探しに行け」という聞き手に対する指令と考えてよい。この「どこかにある」ということが定冠詞を使う前提であり、これを「存在前提」と呼ぶ。存在前提は例(1)~(3)のように、わかりやすいやり方で示されることもあるが、私たちがふだん話すときには、必ずしも手順をきっちり守って話すわけではない。また相手が知っているはずのことに寄りかかって話すこともある。このため、定冠詞が表わす存在前提もさまざまな現われ方することがあり、これが問題を複雑に見せている。

(4) [レストランで] *Où sont les toilettes?* 「トイレはどこですか」

(5) [冷蔵庫をのぞきながら] *Maman. Où est le lait?* 「ママ、牛乳はどこ?」

(4)でいきなり定冠詞が使えるのはなぜか。それは「レストランにはトイレがあるものだ」という常識に寄りかかっているからである。だから厳密に言えば、この例の *les toilettes* は「このレストランのトイレ」をさしているのではない。「このレストランにあるはずのトイレ」をさしている。トイレの存在前提を保証しているのはここでは一般常識である。一方(5)では、家庭で成り立つ習慣的知識というもう少し狭い知識がその保証となる。この家では冷蔵庫にはいつでも牛乳が入れてあるので、話し手は *le lait* で「冷蔵庫に入っているはずの牛乳」をさしている。これらの例が示しているのは、定冠詞 *le* が伝える存在前提とは、物が「ある」ではなくて「あるはず」でもかまわないということである。だから、食卓に塩入れが見えていなくても、「あるはずだ」と思ったら *Tu peux me passer le sel?* 「塩を取ってくれないか」

と言えるのだ。

定冠詞を使うには「枠組み」が必要

このように考えれば、次の例のように定冠詞を使ってよいケースとよくないケースがあるのが理解できる。??記号はかなりおかしな文だという意味で使っている。

(6) Nous sommes entrés dans un village. *L'église* était fermée.

「私たちはとある村に入った。教会は閉っていた」

(7) Nous sommes entrés dans un village. ??*Le grand magasin* était fermé.

「私たちはとある村に入った。デパートは閉っていた」

フランスでは村にはふつう教会があるが、デパートがあるというのはふつうではない。l'église の定冠詞はこの「ふつう」という常識に基づいた使い方なのである。ここで「 にはふつう がある」というときの を、背景となる「枠組み」と呼ぶことにしよう。 が「フランスの村」で が「教会」のとき、「フランスの村」は教会を l'église と表せるために必要な「枠組み」となる。定冠詞の使い方大事なのは、実はこの「枠組み」なのである。例えば「クリスマス」という枠組みがあれば、le sapin de Noël 「クリスマスツリー」、le Père Noël 「サンタクロース」、les cadeaux 「プレゼント」、le bûche 「(薪の形の)クリスマスケーキ」のようにクリスマスにまつわるもろもろの物事は、初めて使うときでも定冠詞を用いることができるし、その方がふつうなのである。

(8) Voici *la cuisine*. Et de l'autre côté du couloir, c'est *la salle de bains*.

「ここが台所です。廊下の反対側がバスルームです」

(8)は建て売り住宅を見に来た客を案内している販売係の科白だとしよう。ここで *Voici une cuisine*. と不定冠詞を使うとすごくおかしい。「台所は家にひとつしかないから」がその理由だと説明されることがあるが、それはまちがっている。「 にはふつう がある」という図式を当てはめると、「家にはふつう台所がある」となり、「家」が上で述べた「枠組み」の働きをする。だから *la cuisine* は「この家」という枠組みの中で理解された台所であり、「(この家の)台所」を意味する。ここでもし *une cuisine* と言うと、枠組みなしで「どれでもいいからひとつの台所」を意味することになりおかしいのである。これでは台所とこの家のつながりが切れてしまう。*la salle de bains* 「バスルーム」も同じことである。

次は子供向けの本から取った「人間クリケット」の遊び方を説明した文章である。

(9) Florian a *le ballon* et *la cuillère* en bois. Les autres ont des numéros et ils courent.

Quand Florian dit "Stop", ils arrêtent de bouger, les jambes bien écartées. Pour faire son parcours de croquet, Florian pousse son ballon avec la cuillère et il le fait passer, dans l'ordre des numéros, entre les jambes de ses copains.

「フロリアンはボールと木の匙を持っています。他の人は数字を書いたカードを持って走ります。フロリアンが止まれと言うと、他の人は脚を大きく開いて止まります。クリケットで決められたコースをたどるために、フロリアンはボールを匙で押して、数字の順番にお友達の脚の間を通します」

le ballon 「ボール」と la cuillère 「匙」には、初めから定冠詞がついていることに注意しよう。ここではボールはクリケットの球のかわりで、匙はスティックの代用品である。球とスティックはクリケットに付き物だから、ここでは「クリケット」というゲームが、定冠詞を使う「枠組み」の働きをしている。だから、le ballon はただのボールではなく「このゲームで使うボール」であり、la cuillère もただの匙ではなく「このゲームで使うスティックの代用品の匙」なのである。(9)で不定冠詞を使って、Florian a *un* ballon et *une* cuillère. としても、文法的にはまったく正しく文章の意味の理解にも問題はない。しかしこうすると、ボールと匙がゲームにたいして持っているつながりがなくなり、文章全体がゲームの遊び方を説明しているという意味合いがなくなってしまう。定冠詞の伝えるこのようなニュアンスを理解するのはフランス語学習の上級編であり、ここまで来れば免許皆伝と言っていいだろう。

「あるはず」を押しつける定冠詞

ここまで述べてきたことは、次の2点にまとめることができる。

- (A) 定冠詞はさされたものがどこかに「ある」という存在前提を表わす。ただし、この「ある」は「あるはずだ」でもよい。
- (B) 「あるはずだ」という存在前提は「枠組み」のなかで成り立つ。「あるはずだ」は「枠組みのなかにあるはずだ」を意味する。

さて、この定冠詞の働きは次のような効果を生む。ブラブラと空き地に入ってしまった私に、中にいる人が *Attention au chien!* 「犬に気をつけて!」と叫んだとする。私はこの空き地に危険が潜んでいるなどとは考えず入って来た。ところが *Attention au chien!* と言われたら、私は *le chien* の定冠詞が伝える存在前提を押しつけられることになり、「いるはずの犬」の危険から逃れようとしてあたりを見回す。これが警告の効果を生む。だからこのようなときに、初めて話題にするからといって *Attention à un chien!* とは言わないのである。

これで前回の宿題を説明できる段階にようやくたどり着いた。

(10) Elle ouvrit *les* yeux. Un vent brusque, décidé, d'était introduit dans *la* chambre. Il transformait *le* rideau en voile, faisait se pencher *les* fleurs dans leur grand vase, à terre, et s'attaquait à présent à son sommeil. (F. Sagan, *La Chamade*)

「彼女は眼をあけた。風が突然、決意したように、寝室にはいつてきたのだった。風はカーテンを帆に変え、大きな花瓶の花を床の方へかしげさせ、いま彼女の眠りに襲いかかっていた」(朝吹登水子訳、新潮文庫)

初めて登場しているにもかかわらず *la chambre, le rideau, les fleurs* に定冠詞がついているのはなぜかが問題だった。この仕組みは基本的には、*Attention au chien!* と同じである。つまり「存在前提の押しつけ」なのだ。ただし、これを無理なく行なうには、作者と読者の間で暗黙の取り決めがなくてはならない。作者はこれからひとつの虚構の物語を読者に提示し、読者は抵抗することなく物語を受け入れるという取り決めである。だから読者は *la chambre* といきなり出て来ても、「えっ、どの部屋のこと?」とたずねたりはせず、「作者がこの物語のなかにあると決めた部屋」だと納得するのである。このとき定冠詞は、作者と読者のあいだに交わされた暗黙の共犯関係のしるしであり、作者の紡ぎ出す虚構世界の存在前提を保証する言語の側からのしるしだと言えるだろう。このように冠詞は、話し手と聞き手のあいだで密やかに働く記号なのである。

(とうごう・ゆうじ)